

---

# 夏恋

他三篇

---

近藤貴弥



出藍文庫

# もくじ

1	夏恋	—————	03
2	郷愁	—————	29
3	返却期限	—————	43
4	タンデム	—————	71

第 1 幕

---

夏恋

## 夏恋

その人が、いつも駅前のお茶店にいることに気づいたのは、もうすぐ夏休みを迎える頃だった。

その人は、窓際のテーブル席に座っている。暑い陽射しを避けるように、涼しい影の向こうで一人。いつもだ。テーブルには数冊の本が置いてあり、その人の視線は本に夢中だ。

日に日に強くなる蝉の鳴き声なんて一つも聞こえないのだろう。僕達が通学をする姿になんて目もくれず、涼しい横顔だけを見せてくれる。僕が足を止め、吸い込まれるように見ている、その人の視線はずっと本に向いている。あの、と声をかけられない僕なんて、見ない。

海色のワンピースに、白い首元へ流れる黒髪は波のようだった。こんなに暑いのに、そ

の人はずっと冷たいままのようで、冬という季節がそのまま人の形となって抜け出してきたような……。

あんまり見ていると、小学校からの幼馴染が茶化すように、どうしたのと訊いてきた。蝉の合唱で、彼女が来たことなんて全然気がつかなかった。驚き、言葉を探す僕と彼女はまじまじと見つめあった。

この子も暑さなんて気にしないような白い女の子だけど、あの人のような知的さはどこにも感じられない。茶色のローファアのせいだろうか、セーラー服のせいだろうか、背が僕より小さいからだろうか、短い黒髪のせいだろうか。あるいは付き合いが長くなって、知っていることが多いからだろうか。

真ん丸い目を僕に向けたかと思えば、喫茶店の方を見て、

「サボるの？」

と尋ねてくる。

「サボらないよ」

僕の答えは、僕が思っているよりも刺々しい返答だった。彼女にこれっぽちもそんな気はないのは分かっているのに、その人を見られたような気がしたから。

僕とその人のことは、幼馴染に知られたくなかったし、教えたくなかった。もし教えてしまえば、僕とその人の関係は、彼女により崩れてしまいそうだったから。彼女は良かれと思つて、そういうことをする。何人かの友達と一緒になれたことがあつても、そこから進展したことは一度もない。僕はその度に怒つたり、愚痴を言つたりした。

何の準備もなく、その人と会うような、話すようなことはできない。

足早に学校に向かう。後ろから足早にローファアの小気味良い音が追いかけてくる。

「そんなに怒らないでよ」

「怒つてないよ」

追いついてきた幼馴染は僕の顔色を確かめる。

「本当？」

「今、サボると夏休み大変じゃないか」

「私は一日ぐらいサボっても平気だよ？」

「いけないことだよ、それは」

「でも去年は楽しかったよね？」

「確かに楽しかった、でも、サボるのは去年だけの約束だったろう？ 僕はもう三年

生なんだよ？」

「確かに……」

「それに、去年みたいな夏休みは嫌じゃない？」

「それは……」

言葉を濁す彼女にとって、去年の夏休みは苦い思い出のようだ。僕にとっても、苦い思い出だ。

高校生を二年も続けて僕は少しだけサボるのが上手くなった。来年の今頃は三年生になって受験で大変だろうから今しかサボれる時はないって話し合った覚えがある。

一限目から登校しなかったり、昼休みにお昼ご飯を外で食べたり、昼休みが終わって

も学校には戻らず映画館に行ったり……。そういうことをしているとテストが良くない結果に終わって、二人揃って夏休みに補習が増えて大変な目にあつた。しかも、そこに夏休みの課題もあつた。僕は自分の分だけじゃなく、彼女の分も一緒になって考えたり教えたりしてもう散々な夏だつた。今年はああいう夏休みはごめんだ。

そんなことを話して、僕達は喫茶店から遠い所へ行く。

電車に揺られ、あの人や喫茶店の側から離れると、あの人は社会人で、今日は休みだからあそこにおいて……。みたいなもつともらしい考えを巡らせて、学校に着く頃になると、あの人の姿は僕の頭から抜け落ちていた。あの人が僕を見ないように、僕もあの人を見なくなつた。でも、あの喫茶店の前を通る度にその姿を探してしまい、その姿形をはつきりと思ひ出す。

部活が終わり、幼馴染と一緒に駅前を通るとあの人の姿はない。窓際の席には誰もいなくて、喫茶店自体はまだ営業しているのに、中から人の温もりがあるように感じられない。ただ眩い西日だけが喫茶店の中まで伸びている。窓には、茹だる暑さに苦しむ僕

の顔があるだけだった。

僕は一度も、その人と話したこともなく、その喫茶店に入ったこともない。喫茶店に入る機会なら、今でも良かった。彼女と一緒に。僕が声をかければ、着いてくるだろう。一緒にサボったり、出掛けたりするのは慣れたものだ。

部活終わりにスイーツとアイスコーヒーなんて一日を頑張った僕達には最高のご褒美に違いない。

けれど、僕達は互いに、六〇〇円のアイスコーヒーを買うより、コンビニにある一〇〇円のアイスコーヒーで十分だった。

もし彼女が、入ってみようよ、と言うならば、僕は断ることなく、きつと喜んで、いいよ、なんて言っただろう。たとえ、その人がいなくても。

その人がいる時に、そんなことを言われたら、僕はなんて答えるのだろう。全然想像できなかった。でもきつと、僕は行かない。何かと理由をつけて、喫茶店から遠ざかる。受験勉強だなんてもつともらしい理由を用意しても。

夏休みを迎えると、今年は補習を免れたこともあり、バイトが少しだけ多くなった。部の時間は減り、要所要所に受験対策の勉強を強いられた。幼馴染も一緒に、どうやら僕達の志望校は同じらしかった。

僕は不思議といつもと変わらない時間に起きられて、まるで学校があるように準備をする。受験対策がどうかということではなくて、朝に出掛けないと、見れないような気がしたから。

その人は、やっぱりそこにいた。その姿を認めると、安心して、どうしてか嬉しくなった。でも、どうしてか不安にもなった。毎朝あそこにいて、何をしているんだろう、と。普段ならそんなことは考えないのに。もつともらしい理由を用意して納得するはずなのに、どうも納得できない。

あの人も、僕達と同じように長い休みの真っ只中なのだろうか。その休みが終われば、もうあの喫茶店には来ないつもりなのだろうか。そうしたら、僕はあの人と一言も話すことなく離れ離れになってしまうのだろうか。それで良いと思う一方で、それでは良く

ないと思う僕もいる。

全てが夏の見せる幻だったらどれだけ良かっただろうか。あの人も幻で、夏休みが終われば幽霊のように消えてなくなってくれば、どれだけ良かっただろうか。でも、その前に幽霊であっても……と考えてしまう。

部活の休憩中に、幼馴染から、今起きた、なんてメッセージが届く。笑って、練習どうするの、と送ると、バイトまで家で勉強、という返事が来た。続けて、明日は起きたら行く、と書かれていた。勉強頑張ってるね、分からないところは一緒に考えよう、と返事を送る頃には、休憩は終わって、バイトまで部活を続けた。

バイト先に来て真っ先には、

「朝から練習なんて無理だよ」

と零していた。部活の朝練は別に今年から始まったことではなく、去年もそうだったし、毎日朝から練習があるわけじゃない。昼からの日もある。夏休みまで頑張る必要のないのに、と言っていたのは去年のこの子で、今も同じことを言う。

「そう？」

「そうだよ、去年はきみも私と一緒にだったじゃん？」

何かあるのではないかと、勘繰る目つきだ。僕は咄嗟に

「何もないよ」

と答えた。それでも、彼女の追及は止まらない。

「怪しい……」

僕も去年は、この子と同じように時々、朝からの練習に間に合わなかった。一緒にサボることもあれば、補習に出席したりすることもあった。

それが今年は、ちゃんとしている。合間合間の受験勉強もサボっていない。顧問の先生や後輩からは驚かれ続けている。何かあったのかと訊かれても、特には、と答えるしかなかった。三年生になったのを自覚した、なんて答える余裕すらあった。

僕は、学校の子に、あの人のことやあの喫茶店のことを知られたくなかった。駅前で、ぼつんと営まれている喫茶店のことや、そのお店の窓際の席で、本を読む女の人のこと

などは特に。

僕だけは知っていることで、特別なことだった。きっと、喫茶店の人やあの人からしたら、何も特別なことじゃないような気もするけれど。僕だけが知っている秘密は、僕を去年よりも少し大人にしたのだ。

次の朝も、その次の朝もその人はいた。僕はその横顔を見かけるだけで満足して、学校に向かった。声をかける勇氣は全然なかった。

幼馴染から部活の欠席の連絡は来たり、来なかったりして、受験対策で顔を合わせたりして、夏休みの半分が過ぎた。この頃になると、僕達の部活ではお盆休みの最終日にある夏祭りの話題が持ち出されるようになる。僕達の地元で開催される夏祭りでは、屋台なんかも出るしその日は夜遅くまで出掛けても許されるような夜だった。

学校に行く電車の中で、夏祭りのことを口にする。

「今年もやるんだね、夏祭り」

「みたいだね」

「今年も行く？」

去年も一昨年も僕はこの子と一緒に夏祭りに参加した。夏祭りの時に彼女は浴衣を着てくるのだけれど、それが普通の彼女とは違って綺麗に見える。彼女がそうして着飾ってくるので、普段着で出かけるのはいけないような気がして、その時ばかりは浴衣に袖を通す。バイト終わりに一緒に買った浴衣を。

だから今年もそうなるだろうと思っていたんだけど、彼女はそうは思っていないらしい。「え、行かないつもりなの？」

僕が慌てて訊くと、彼女は珍しく狼狽していた。

「え？ え、いや、だって、受験とかあるし……頑張ってるし、え、行くの？」

「息抜きは大事だと思うんだ」

「だよね、大事だよね。うん、行こう！」

笑う友達に、僕は安心した。この子は笑っている方が似合う。一緒にいる時はよく笑っているし。

そうして月日は経ち、駅前はずいぶん夏祭りの提灯やチラシやポスターが見えるようになり、その喫茶店のドアや窓にもポスターがあった。でも、その人はそんな言葉に踊らされることなく、静かに、今日も本を読んでいる。

そのまま電車に乗って、朝練に行ってもよかつた。けど、幼馴染や去年の僕自身の言葉を思い出して、段々と朝練や部活のことが頭から流れ落ちていった。汗が額から顎を伝い、地面に落ちるように。

朝練に行っても良かつた。でも、それは、テストほど僕達を拘束する力が強いものじゃなかつた。それに幼馴染は家において、受験勉強に集中するようだ。勉強に飽きたら部活に来るらしい。時間は全然あるし誰にも見られることはない。

僕の足は自然と、まるでそうするのが当然であるかのように、喫茶店に向かっていた。ちりん、とドアの上部に付けられたベルが鳴る。店内は小さく、狭かつた。

ドアの正面には数人が座れるカウンターがあり、左右に四人がけのテーブル席が並んでいる。

その人の姿は、やはり窓際のテーブル席にあった。海色のワンピースを着ていて、黒髪が白い肌を波のように漂っている。唯一違うところがあるとすれば、大きな黒い目が、僕を見ていたところだった。

テーブルには数冊の本と、水の入ったグラスと円筒の大きなグラスがある。グラスにはバニラのアイスクリームにスプーンが挿してあり、さくらんぼが緑の湖の中で浮いている。

外の光を受け、グラスは少し汗をかいていた。

その人も外の光を正面から受けているのにもかかわらず、汗一つ見えない。

「マスターはちよつと買い出しに行ってるよ。アイス、なくなつたんだって」

ドアの前で立っている僕に、その人は澄んだ声で教えてくれた。

「こつち来たら？」

正面の椅子に手を差し伸べるその人に案内されるように、僕はそこに座った。

お店の人が居ないなら、後で来たらいい。それに、部活もある。後で来ます、と言え

ばよかった。それなのに僕は、その人の前に座ってしまった。

僕達の間会話らしい会話は一つもなかった。その人は本をのんびり読んでいる。分厚い本だった。

僕を目の前に座らせたのに、何も気にしていないようだった。時々、クリームソーダのアイスをすくう時だけは、僕のことを思い出して、その黒々とした瞳を向ける。僕はそのタイミングになると、何かを話そうと意気込むのだけれど、頭は真っ白になって、息をのむだけで何も話せなかった。

何をしているんですか。

そんな一言が、出ない。

お店の人が帰ってきてしまえば、僕達はきつと離れ離れになる。カウンターが空いているテーブル席に案内されることだろう。そして、いつもと変わらない日々を迎えるだろう。この喫茶店に足を運んだ時と何も変わっていない。

この人が何者なのか、何をしているのか、何も知れない。

僕はどうしても、この人のことを一日に一度必ず思い出し、その姿が見えなかったことを心苦しく思うのだろうか。

今この機会を逃せば、もう二度と知れないような気がした。去年の僕とは違う。短い夏の間積み重ねられた自信は、僕を一つ大人にした。

「あの」

「ん？」

声をかけると、その人は読みかけの本をテーブルの端に置いた。

「いつも、いませんか？」

「いつも？」

その人は、訝しむように僕の目を覗き込む。

どうして、いつも、という言葉が僕から出てきたのか探るようだった。その人の視線は、ゆっくりと僕の頭上から爪先まで移った。

「学校に行く前に……見かけるんです」

その人の視線に堪えられなくなって顔が熱くなったのと、その人の頬に楽しげな笑みが浮かんだのは、同じような気がした。

その人は多くは語らないけれど、その頬に浮かぶ笑みで、どうやら僕のことには、筒抜けみたいだ。

「知ってたんですか？」

確かめるように訊いても、その人は僕を試すように笑うだけだった。

「なにが？」

「……いいです」

「むくれなくてもいいんじゃない？」

「怒ってません」

「本当？」

「本当です」

「それでさ、きみはどうして？」

「どうして？」

その人の質問の意味が分からなくて訊き返すと、その人は思いの外真面目な顔をしていて、僕のまた心が騒がしくなる。

どうしてと訊かれ、一体何がどうしてなのか分からなかった。けれども、初めて、その人から歩み寄られたような気がして、嬉しかった。また、すぐに答えられなくて恥はずかしくもなった。

正直に答えればいいはずなのに、僕は言葉を失ったように黙っていた。心のどこかで、正直に答えてはいけないような気がした。きっとそれは、僕の思い過ごしで、その人は全くそんなことを思っていない。ただ純粹に、どうして気になっているのか知りたいだけ。そう頭では分かっているのに、心はいつまでも言葉を選んでいいる。決まっている言葉があるはずなのに、その言葉を選んでしまえばいけない予感があった。

僕がその人を知らないからなのか、その人が僕も知らないからなのか、僕もその人も互いに全然知らない。だから、言っではいけないような気がした。

気になったから、そう伝えるのが、どうしてだか伝えられない。もし僕が、この人と知り合いで、友達なら、僕は素直に言えたのに。友達にならば、言えるのに。

僕が答えられないでいると、その人はゆつくりと言葉を並べて教えてくれる。僕の胸の中にある言葉を探り当てるように。

「きみは学校に行く前に、私をいつも見かけていた。今日もだね。普段なら、普通に学校に行くはずなのに、今はこうして私と向き合い、話している。そういう、どうして、だよ」

「……分かりません」

「わからない？」

「どうしてなのか、僕にも分かりません。でも、でも……？」

「私に訊かれてもなあ」

僕の言葉が嘘なのかは、僕自身にも分からなかった。耳まで熱い。

その人の顔に漂う苦笑いは、日を受ける水面のように輝いていて、冬みたいな冷たさ

を覚えたのに、強く夏を感じさせた。夏らしいところなんて、何もないのに。熱くなつた僕の身体のせいだろう。

その人は、僕の目をじつと見ていた。僕の中から、僕の心の内までを透かして見るように。心の内まで見られてしまうのは嫌だ。全てを見られて、全てを知られるのは嫌だ。ずるい。

気になったからと伝えられず、その人だけが知ってしまうのは嫌だ。どうして嫌と思ふのか分からない。知られたくないという思いと知ってほしいという両方が、僕の胸にある。

「どうして、いつもいるんですか。朝だけ。一人で涼しげに静かに。どうして、夕方には、いないんですか」

その人の目が大きく見開かれて、それから沈黙が満ちた。その人は、ストローでメロンソーダを飲んで、まるで沈黙なんて気にしないようだったけど、その仕草がとても沈黙を気にしているように思えた。

その人はこう答えてくれた。その頬は、僕が見たことがないほど真っ赤で、柔らかい微笑みを浮かべていた。

「人をね、待っているの。この夏の間だけ」

その人は細い指で、自身の左手の薬指をなでた。そこにあるはずの何かを慈しむように。確かめる僕の言葉は、僕自身が知らないうちに刺々しいものに変わっていた。まるで、その人が隠していたことを責めるように。

「人を？」

でもその人は、僕の刺々しい言葉を気にしないように優しく答えてくれる。思い出を語るその人はいつまでも、見たことのないほど綺麗だった。

「そう、人を待っているの」

「まだ、待っているんですか？」

「そうだよ。明日も明後日も明々後日も、待ってるんだ」

「そんなに待って、どうするんですか？」

「好きですって言われるの。結婚してくださいって言われるの。そう言われるのを待っているの……そう約束したから」

「いつですか？」

「あの人が帰ってくる日まで、待ってるの」

そう語る言葉はどれも優しく、かつての思い出にひたっているようで、とても幸せそうだった。

僕の心はどうしてか烈しく掻き乱されて、何も言えなかった。どうして会いに行ってくれないのだろうか。会いに行ってくれば、僕はこんなに苦しまずに済んだのに。

「会いに行けばいいじゃないですか。こんな所で待たなくても、すぐに。だったら、僕は……僕は……あなたなんか気にならなかったのに！」

理不尽な怒りだった。顔から火が出るんじゃないかと思うくらい熱い。その人は驚くことなく、優しく謝るように僕を見ていた。僕がそんなことを言うのを知っていたように。伏し目がちなその人から語られた言葉は、重く、僕なんて全然関係ないところで全て

は始まっていて、終わっていた。

「ごめんね。でも、私からは会えないから。夢では会えるんだよ……。探しに行くんだけどね。会えないんだ。知ってるんだけどね、もう会えないなんて。でも、……。もしかしたらって思っちゃう。だから、ここで待つてるの。夏祭りの時には会えるのかな……。」その言葉の全ての意味を訊けなかったけれど、きっとその人の恋人はもうこの世にはいないのだろう。訊いてしまうのが怖かったけれど、僕は全てを確かめるように、こう訊いた。

「お盆が終わったら、どうするんですか？」

「どうするんだらうね」

悲しそうに笑って、それから、お彼岸までまた待つかもしれないね、と小さな声でつけ足した。

喫茶店は静かになった。僕は、その人にどういう言葉をかけていいか分からず、かといつて何も知らないまま去ることはできなくて、ただこの心に残っている感情をどうに

かしたかった。

助けを求めるように、その人を見上げて、その人はもう僕なんか眼中になくて、静かに本を読んでいる。

その本が一ページも捲られていないことに気づいて、同じ文章を追いかけるその人の瞳に目が釘づけになった。

その瞳はずっと潤んでいて、涙が零れるのを堪えているようだった。それまで騒がしく、掻き乱されていた僕の心はゆつくりと落ち着いたように思えて、まだしつかりと尾を引いていて、ぶつきらぼうにこう訊いた。

「また、会いに来てもいいですか？」

目の端に浮かぶ涙をそっと拭って、その人は僕の希望を柔らかく否定した。

「駄目だよ」

その人がそう答えるのを、僕は分かっていた。僕がどれほど思っても、この人の心はずっと過去の恋人の中にある。僕なんか相手になるはずもない。好きですと伝えること

もなく終わる恋愛もあることを、その人は教えてくれた。

自分自身はずっと過去にいるのに、僕の背中を押そうとする。

「きみはこんな所に、私なんかに会いに来ちゃいけないよ」

「でも……」

否定しようとした僕の言葉は少し震えていた。

「だったら、もっと早く、教えてほしかったです。本なんて読んでなくて、人を待つていることを教えてくれたら、僕は……」

「声、かけなかった？」

「その人を探すのを手伝います」

「優しいんだね、きみは」

僕の答えに、その人は朗らかに笑った。

お店の人がようやく帰ってきて、初めてそのお店のアイスコーヒーを飲んだ。苦かった。ガムシロップやミルクを入れても、苦くて、その人もお店の人も、微笑ましいもの

を見るように笑っていた。

夏祭りが終わった翌朝、僕と彼女は受験対策で朝から学校に向かっていた。蝉の鳴き声が澄み渡った青空に響き渡る。ちよつと遅くなるという連絡を受けて、僕は駅前で彼女が来るのを待っていた。

喫茶店の中には、誰もいなかった。

あれほど僕の心を掻き乱したあの人の姿も声も途端にぼんやりと形を失っていた。

ローファーがアスファルトを叩く小気味良い音が遠くから聞こえてくる。息を切らせて駅前にやってきた彼女は、喫茶店と僕とを交互に見て、こう尋ねてきた。

「サボるの？」

「サボらないよ」

そう言っつて、僕達は学校に向かった。

第 2 幕

---

鄉  
愁

## 郷愁

この話は生前祖父が酒の席で必ず聞かせてくれた話であり、認知症を患い郷里の介護施設に入所してからはその職員や利用者に繰り返し聞かせた話でもある。

大正十五年の頃のこと、その頃の祖父は徳島の鍛冶屋原駅の近郊に暮らしていて、秋には東京の一高へと進学することになっていた。

### §

色濃く立ち上る入道雲を切り裂くように黒煙が流れ、猛々しく鳴き続ける蝉の声を掻き消すようにその轟音を響かせる。祖父が駅前に来た時には、列車はもう東へと走りだしていた。

息は切れ、玉のような汗が背中や額から流れ落ちていく。

疎らに駅舎から出てくる乗客はいずれも見知った顔の大人達ばかりで、祖父を見かけると声をかける。また犬伏駅の上り坂で止まったという声が上がれば、自転車の方がよっぽど速いという言葉が続き、それを聞き辺りには笑い声が生まれる。

次の列車は昨年までは一時間後だったのだが、利用客減少の煽りを受け、本数が減らされ、次の列車が到着するのは数時間後だった。列車が来るまで、家で図画や習字の勉強に励むことも考えたのだが、家に戻るとまた手伝いに駆り出されてしまい列車に乗り遅れてしまいそうだった。

大人達が駅舎から離れていくと、屋根の小さな影の中に一人の女が立っているのが目についた。瓜実顔に束髪に結った黒髪。藍で染めた紗の着物を着た女は、この夏に似合わない涼し気な目元をしている。この小さな村ではいずれも顔見知りなこともあり、祖父も女も互いのことを知っていた。

女は妙子といい、この村に鉄道を敷くために政治家に掛け合ったという噂もある商家

の娘であった。列車は人を運ぶだけではなく、農作物や染め物なども運べるなどの言葉を用いて説得したらしい。

妙子の方も祖父に気づいたらしく、お辞儀した後、優しい声でこう訊く。

「どこまで？」

その顔はいつでも涼し気で、烈しい陽の光を浴び、顔一面に汗をかいている祖父は突然恥ずかしくなり、小さな声で答える。

「瀬戸内海を見に行くんだ」

祖父はそう言ったが、全然本音ではなかった。祖父はこれまで列車に乗ったこともなければ、村を出たこともない。村の外のこととは大人達から教えてもらうことが多かった。それでも瀬戸内海は越えず、瀬戸内海を越えた世界の話には、村に病院を設立した医者、一人息子の新太郎からの書簡でしか触れられなかった。東京から届く書簡でしか。

自転車よりも遅いと話される列車に乗るなど考えたこともなかった。それがこうして、乗ろうと思ったのは、祖父はこの秋には鍛冶屋原を去り、東京で暮らすことになってい

た。新太郎曰く、東京という街は鉄道が敷かれ、百貨店や大学が建っている明るく華やかな街らしい。洋装をまとった男女が街中を歩く姿を目撃することもあるとのことだ。

祖父は列車に乗ったことがないことで恥をかきたくなかった。新太郎にそのことを相談すると、ならばひとまず鍛冶屋原駅から列車に乗ってみてはどうか、と提案され、新太郎がそう言うならばと素直に受け入れた。

新太郎はこの地から一高に進学した最初の人であり、帝大に入学した後、今では東京の大学で教鞭を執っている教員である。鍛冶屋原に居た頃に、祖父に漢籍や英語やドイツ語を教えたことは一度や二度ではない。祖父は新太郎の背中を追いかけるように一高を目指し、同じように帝大への入学を考えている。

妙子に事の一切を打ち明けるのは気恥ずかしく、瀬戸内海を見に行くと嘘を言った。吉野川すら越えたことがないのに。祖父はそれ以上、踏み込まれるのを拒むようにこういう言葉を返す。

「妙子さんは、どこまで行くの？」

鍛冶屋原駅で降りた客の中に妙子の姿はなかった。ということは、妙子は祖父と同じように列車に間に合わなかったのだろう。しかし、妙子の白い首や額には汗一つ見えず急いだ様子一つ見えない。祖父よりずっと早くに着いていたのならば、さっきの列車には間に合っていたのではないか。

もしかすれば、誰か待っているのではないだろうか。しかし、この村に誰かが帰ってくるということは聞いたことがない。

祖父の心はざわつき、ぬるい汗が背中を伝う。

妙子は静かに、口を開けた。涼し気な目元にはいつしか躊躇いや僅かながらの後悔の色が見て取れる。しかしそれでも深く黒い瞳の奥には透き通るような信仰があった。

「人を、待っているの」

祖父の胸の中には当然、誰を待っているのかという問い掛けの言葉が生じていたが、その言葉が紡がれることはなかった。妙子が誰を待っているのかなどは、薄ぼんやりと祖父でも分かっていた。そういう浮いた噂を時々、耳にすることがあったから。

しかし、当の新太郎は鍛冶屋原に帰ってきていない。妙子が新太郎の元に嫁ぐということもない。その縁談が破談になったという噂も聞いていない。

祖父が口にしなかつたその名前を、妙子も言葉にはせず、ただ同じ言葉を繰り返す。

「待つて、いるの……」

「でも……新太郎さんは……」

祖父が堪らず呟くと、妙子は寂しく笑った。新太郎が帰つてこないことは、妙子の方がよく知っていることなど誰の目から見ても明らかだった。祖父との手紙のやり取りとは全然違う調子で、新太郎は自身のことや生活のことを妙子に書き綴っているのだろう。妙子はその一文一文を丁寧に思い出し、慈しむように祖父に語りかけた。

「新太郎さんは、お仕事でお忙しいみたい。自分のこれからのことよりも、この国を支えるために多くの学生に勉強を教えたいそうで。多くのことを学ぶため西欧へ訪れることもお考えのようです。お帰りになったその時は私も、この街を離れて、東京で暮らすことになっているの」

新太郎が西欧へ足を運ぼうとしていることは初耳であった。祖父に送られてくる手紙には東京の町並みのことや勉強の助言が多かった。西欧の話などは微塵も見当たらなかった。

「新太郎さんはいつ、西欧へ？」

「……お仕事が落ち着いたら、とだけ」

「自分は秋には東京へ行くから、新太郎さんと話すよ。こつちに戻ってくるように、言うよ」

祖父がそう言ったのは、精一杯の勇氣であり、自分にしかできないことだったからだ。祖父が新太郎と会うこと自体は自然であり、妙子との関係について何か考えていると思われることはないだろう。つまり、自分が新太郎と会えば、新太郎の本音を聞き出せるという考えに至った。そうすれば、妙子と新太郎の関係も今よりも良くなるだろう。と、そう信じている。新太郎の帰りを妙子がそう信じているように。

けれども、妙子は目を伏せ、首を静かに振り、祖父の提案を拒んだ。祖父が衝動的に

尋ねるよりも早く、その瞳に微かな涙の気配を漂わせ、答える。語れる言葉はどれも優しく、温かい。

「私達、約束したから。新太郎さんが帰ってくるって仰って、私はここで待っていますと答えた……だから、大丈夫よ。私は待つだけでいいの」

その言葉は新太郎のことを信じるいじらしい言葉であったが、祖父にとってしてみれば烈しい温度差を覚えるばかりの言葉で、まだ何か自分の知らないことがあるような気がした。

「どうして？」

祖父の素直な疑問に、妙子は薄く笑みを浮かべる。その表情の真意を確かめるように、じつと双眸で見つめる。自分は何も間違ったことは言っていないのに、その目を見ていると、何か間違ったことを言ってしまったような気がする。妙子は、新太郎の妻となることを快く思っていないとでもいうのだろうか。だから、祖父の申し出を受け入れたくないのかもしれない。あるいは、新太郎の方で何か不都合があるのかもしれない。

祖父の頭ではそれ以上の考えが浮かびそうになかった。どちらかが悪く、どちらかを正せば、事は良い方向に進むのではないだろうかと思つた。

妙子が僅かに俯いた時、その視線に釣られるように祖父の視線も下がり、妙子の膝に揃えられた手が、微かに震えているのが見えた。その手を取ろうとした時、妙子の目は祖父の心を見透かすように、じつと祖父の目を見ていた。

「二つ、約束してほしいことがあるの」

祖父は目を逸らすことなく頷き、妙子の語る二つの約束に耳を傾ける。

「一つは、東京に行つても新太郎さんを探さないでほしいの。新太郎さんを探して、私のことを話さないでほしいの。そういうことはもう、したから。伝えられる限りの言葉で伝えた。でも、……新太郎さんは帰つてこない」

「新太郎さんに帰つてきてほしい？」

「酷いこと聞くのね。帰つてきてほしいわ。……でも」

「でも?」

「二つ目の約束は、私がこれから話すことを誰にも喋らないでほしいってこと」

「誰にも？」

「そう、誰にも。東京へ行つて、新太郎さんともし会うことになつても、話さないでほしいの。分かった？」

「……分かった」

「新太郎さんは縁談を断る気にいるわ。でもそれはお仕事のためだとか東京に住んでい  
るからということじゃなくて、ただ、縁談というのが、お好きじゃないみたい。そうい  
う旧弊なものがお好きじゃないの。そういう家に縛られたものではなく、個人の恋愛を、  
個人と個人の間で芽吹き、育まれる恋愛を、新太郎さんは大切に扱いたい……だから、こ  
の縁談……私とのことは、もう何も……」

新太郎のことを聞かされ、祖父は身体の芯が熱くなった。堪らず、熱を帯びた言葉を  
上げる。

「そんなの、新太郎さんは……そんな人じゃない。自分は知ってるんだよ。新太郎さん

は、優しく、頭が良いんだ……。新太郎さんは……」

涙と共に零れた言葉は、どれほど妙子に伝わったことだろうか。震える指で涙を拭かれる。妙子の指は祖父の涙と変わらないほど熱かった。そうして、その涼し気な、夏の暑さに負けないような目元は大粒の涙に濡れていた。

「新太郎さんのことは誰も知らないから、私ときみだけの秘密だから。お父様は鉄道や家のことでお忙しいみたいで……。だから、いい？ 黙っていられる？」

「妙子さんはそれで良いんですか？」

「……新太郎さんの言葉をお借りするんですしたら、そうね、私、新太郎さんのことを愛しているの。でも、でもね、私は家に縛られているの。女だし、新太郎さん達みたいに東京へ出られるほど頭が良いわけじゃないから……」

妙子が言い終えた時、東の方から大きな音が響いてくる。駅舎や線路の周りにいた鳥達は一斉に羽ばたき、方々へと飛び去る。

停車場に列車が迂り込んでくるのが見えた。

視線を戻すと、妙子は涙を拭っており手の震えも見えず、先ほどまでの姿は微塵も見  
いだせない。けれどもよく見ると、その涼し気な目元は赤かった。

「行ってらっしゃい」

寂しく微笑む妙子に、祖父はこういう言葉をかけた。

「自分は、また必ず、帰ってきます。一高を卒業してからでも。帝大を卒業してからで  
も。必ず。絶対に。……そうしたら」

「……そうしたら？」

「いえ、……何でもないです。忘れてください」

そうしたらという言葉の続きを、妙子に伝えようとすると頬が熱くなる。祖父は目を  
背け、それ以上のことは伝えられなかった。新太郎ほど、自分の気持ちに正直になるこ  
ともできず、また自分の気持ちを伝えられるほど賢くもなかった。

列車は祖父を乗せ、東へと進む。犬伏駅の上り坂で止まることなく、東へと進み続ける。

祖父の話はそこで終わる。

鍛冶屋原駅から板野駅を繋ぐその鉄道は乗客の少なさから赤字が膨らみ、本数は減り続け、惜しまれつつも廃線となった。今ではその線路の周りを、バスが走っている。きっとそのバスも、誰かの思いを繋げているのだろう。

第 3 幕

---

返却期限

## 返却期限

いきなり降ってきた雨は凄まじく、俺達の身体を即座に濡らす。ユニフォームは重くなり身体を冷やす。腰に着けているコルセットも濡れているような気がして、頭の中で慎重にそれでも機敏に動くようにイメージする。

いつもの練習と同じ動きを思い出す。確かめるように足先でグラウンドの感触を確かめる。微かに柔らかいような気がする。

急に動くとき腰に負担がかかり痛むこともあるから冬場は普段よりも気を付けて、と病院の先生に言われたことも一緒に思い出した。

一年の嫌な記憶が蘇る。あの時は晴れていたし、ゴールデンウィークで練習漬けの毎日だった。内野ノックを受けていて、ファーストに投げようとした瞬間、腰に強烈な痛みが走った。

嫌な思い出を消し去るように集中してみるが、バッターボックスに立つ監督の姿を烈しい雨に遮られ、はつきりと見えない。

ボールはきつとあまり跳ねないだろうから、いつもより前へ出ることを意識する。

高い金属音が響いた後、ボールは俺の所に転がってくる。

思っていた通りだ。バウンドの跳ねは弱く、速度も遅い。

急いでそれでも慌てずに右足から踏み込み、キャッチしてから投げようとして、指からボールが滑り落ちた。

ボールは足元に落ちていた。

大雨の向こう側から、部員達の大きな声。すぐに拾い上げ、ファーストへ。送球は思ったよりも少しだけ低かったが、ミットに納まった。

普段と違った土の感触が、冷えた指先に残っていた。

監督からの指示で部室に避難した俺達は口々に雨のことを話したし、雨天時の対策も何個か確認した。キャッチしてからの送球について指摘され、言われた通り、俺は指先

で投げてしまっていた。

やむかやまないかはもちろんのこと、この後の練習のことも。監督のことだから、雨がやめないと考えて、室内練習に切り替えることもあるかもしれない。

もしかしたら悪天候での試合を想定して、なんてことも有り得るかもしれない。何もこんな二月にやるようなことではないと思うけど。

空はずつと向こうまで真つ黒な雲に覆われている。部室の中まで、激しい雨音が響いている。

予備のコルセットを取り出そうとエナメルの中を覗くと、見慣れない文庫本が入っていた。

家でこんな古くて小難しい本を読むのは誰もいないし、自分で買った覚えもない。取り出してみると、本の上の方に図書室の貸し出し印があった。

図書室はグラウンドから一番近い校舎の二階の端にある。走って返しに行つて、すぐに戻ってくれば間に合うだろう。頑張れば図書室の窓からグラウンドで練習しているのは見

えるし、図書室にいるであろう担当職員の亜子ちゃんに返却期限が遅れたことをねちねち言われようが、間に合うだろう。多分。亜子ちゃんに見つかる前に、カウンターにいる誰かに渡して走って去ればいい。俺だって練習があるんだし。

監督とキャプテンと話し合いはまだ終わる様子はなさそうで、一声かけて図書室へ走った。校舎の中に入ると、雨音は少し和らいだように感じた。

この本は、この前のテストが返ってきた時の亜子ちゃんの説明が全然分からなかったから借りた本だ。借りたその日に開いてみたけど、全然面白くなくてすぐに読むのをやめた。鞆の中に突っ込んだままにして、返却期限も何日か過ぎていたらしい。亜子ちゃんから、本の返却について言われたことがあったけど、そのことも忘れてしまっていたようだ。

見つかると絶対に怒られるだろうし、誰もいないでほしい……。

そう願いながら図書室のドアを開けようとしたら、勝手に開いた。止まろうとしたけど突然過ぎて難しくて、胸の辺りに衝撃が広がる。それから女子の驚いた声。

「大丈夫っすか！」

俺も突然のことで、大きな声で心配する。女子としては少し低い声が返ってきた。

「あー、うん、大丈夫……」

鼻や額を抑えるその人は、二つ上の先輩で、かつては図書委員を務めていた柏木先輩だった。

「柏木先輩！」

久し振りに見た先輩に、俺はまた大声を上げた。すると先輩はすぐに眼鏡の奥の瞳を細めて、しつと唇を指先へ。

大学生になった先輩に、高校の頃の面影は全然ない。三つ編みをやめた黒髪は癖がなく真つ直ぐ肩ぐらゐまで伸びていて艶やかで、シャツもニットもスカートも全部が大人っぽい。昔と変わらないはずの銀フレームの眼鏡が途端に知的に見えた。

セーラー服に三つ編みっていういかにも文学少女らしい姿は、今の柏木先輩のどこにも見当たらない。

「え、……あ、大学は？」

「今日はもう講義ないんだよ」

「それで、学校に……？」

「返し忘れた本があつて……」

恥ずかしそうに笑う先輩の姿は、珍しかった。

俺と先輩の家は近かったけど、朝練で登校が早くて、練習や後片付けやミーティングで帰宅が遅い俺とは全然接点がなかった。入学式とか終業式とかに時々顔を合わす程度。連絡先とかは交換しなかった。先輩は小学生の時から図書室にいて、中学から図書委員を続けているような人で、俺みたいな奴と合うような話題は全然ないだろうし。

図書室のどこを見渡しても、亜子ちゃんの姿はなかった。普段なら、愛想なくU字型の受付カウンターを根城にしているのに。

先輩は懐かしいなあ……と呟いて、U字型の受付カウンターの中に入り、椅子に座る。先輩の後ろには図書カードはしまっているケースやファイルが置いており、カーテンが

かけられた窓の向こうからは大きな雨音が流れていた。

先輩はもう図書委員じゃないのに、そこにいて、俺は当然過ぎる疑問を投げかけた。

「……帰らないんすか？」

「亜子ちゃんに留守番頼まれちゃってさ……」

「マジっすか……」

いると思っていて図書委員は、今日はいない日で、亜子ちゃん一人の日だったのか。先輩がいてくれて亜子ちゃんの小言は聞かなくて済みそうだけど、それって許されるのか……？

「食堂行っただけだろうし、すぐに帰ってくると思うよ」

「本当にすくなんすかねえ……？」

「まあどうせ、これでしょ」

と言って、先輩は呆れたように口元に指でピースサインを作る。

亜子ちゃんが受付カウンターにいない時は、食堂に行ってくるって言って、裏門の所

に置いてある喫煙所で一服してくるのが、いつものパターンだ。

「それで、きみはどうしたの？」

「あ、えっと、本を借りてて、返しにきたんすよ」

「……本？」

ズボンの尻ポケットにしまっていた文庫本を先輩に見せる。先輩は昔のようにカウンスターの後ろに置いてあるケースから俺の図書カードを取り出した。

大きな溜め息をついて、ぼつりと呟いた。

「……期限、過ぎてるじゃない」

すぐに、私が見えたことじゃないけど、つて付け足した。

「あー、えー、面白くて、つい……」

咄嗟の嘘は、先輩には通じないようだった。無言で俺の目を見上げてくる。じっと見抜くように。丸くて大きな目に見つめられて、俺は正直に答えた。

「あれなんすよ、亜子ちゃんの作った問題が分からなくて、それで……」

「亜子ちゃんの作る問題、意地悪だもんね。私もやられたなあ……」

「そうなんすよ！ マジなんなんすかあれ！」

「それで読んで分かったの？」

「全く全然。まず読めなくて、むずくて」

先輩は俺の感想が面白かったのか微笑を零して、指で表紙のタイトルを追いかける。

最初で読まなくなっただけど、分かったことがある。教科書に載っていたのは全体の一部で、テストに出てきたのは更に一部だった。全体像のことを訊かれても、そんなの分かるわけがない。配点は一点と正解できなくても問題ないような扱いだったけど、それでも不正解なのは嫌だ。

「この作家の書く話は難しいもんね。私も、ちょっと分からないかな」

恥ずかしそうに笑う先輩の言葉が意外だった。先輩は小説のことなら何でも知っているように思っていたから。

「え、そうなんすか？」

「そうだよ、意外？」

「あ、いや、そんなことは……。でも、先輩、志望校受かったんすよね？」

「そうだけど……。誰から訊いたの、そんなこと？」

「母ちゃんから聞いて、それで」

「ってことは、お母さんからかあ……」

「あの私立は一般で入ろうとしたら難しいんすよね？」

「そんな言うほど難しくはないよ」

「でも、峰くんは難しいって言ってたんすよ？」

「峰くんも私の後輩になるんだあ……。野球強いもんね」

「そうなんすよ！」

先輩の通う私立はここらへんでは特に野球部が強い。大学野球リーグの最多優勝記録を持つようなところで、プロ野球選手も輩出している大学だった。大学に入っても野球を続けようって考えている三年生は推薦でそこを受けることが多くて、今年も何

人かが受験して、受かったのはキャプテンの峰くんだけだった。

「順一くんも来年はそこ受けるの？」

「俺は多分、推薦とか無理っすねえ……」

「そんなことないと思うけどなあ、頑張ってるじゃん？」

にこやかに笑う先輩に、俺も無理に笑って言った。

「腰痛めてる奴は無理っすよ」

「そうなの？」

先輩は俺の答えが意外だったのか、首を傾げる。先輩は図書室にいるから、そういうことは知らないんだろう。素っ気ない返事をした。

「そうっす」

「それじゃ、野球は高校でやめちゃうの？ 小学校の時からやってたのに？」

「あ、いや、そういう……どうなんすかねえ……」

腰が痛むようになったのは高校に入学してからだった。違和感は中学の時からあった

けど、気にしなかった。それが高校に入って一年の夏休み、大変なことが起きた。

朝に起き上がれなくて病院に運ばれ、椎間板ヘルニアと診断された。野球を続けることは現状では可能だけれど、無理はしないようにと繰り返し言われた。

スポーツ推薦なんかで選ばれることはないだろうし、仮に選ばれたところで、受かるなんてことはない。スタメンになれないベンチ入りの奴を推薦で採ろうというところはない。甲子園で活躍したとかそういうのがあれば話は変わってくるかもしれないけれど、二年連続県大会決勝で負けるようなチームに、そんなのは夢のまた夢。後一步があまりに遠い。

峰くんや先輩が受かった大学に受かろうとしたら、先輩のように勉強するしかなくて、配点が一点の問題であろうと落としたくもなかった。

亜子ちゃんの作る問題は苦手で嫌いだけれど、分からないまままで終わらせたくなかった。でも、小学校から野球ばっかやってきた俺には、恋愛とか学問とか昔の時代のこととか全然分からない。読んでみようにも、全然分からない。

先輩でも分からないのに、俺なんか分かるはずもなかった。

そんなことを話していると、窓の向こうから雨音は聞こえなくなった。

先輩はそつと立ち上がって、微かにカーテンを開けて外を見る。先輩の後ろから覗くと、雨はやんで、雪になっていた。

視線をグラウンドの方に向けると、部員達の姿はない。もしかすると、室内練習に切り替わったのかもしれない。急いで合流しないといけない。

「練習の途中なんで、じゃ！」

「すぐにやむよ」

出て行くこうとする俺を、先輩は意外な一言で引き留めた。

「なんで分かるんすか？」

「そういう雲だから」

「そうなんすか？」

「うん、そう。それに……」

先輩は言葉を区切ると、カウンターの下に潜り込んだ。

「柏木先輩？」

俺が声をかけても返事は返ってこない。少し経ってから先輩が顔を出して、俺を手招く。カウンターの方まで近づくと、足元から温かい風が吹いてきた。視線を落とすと、小さなヒーターが俺に向けられていた。

「暖まってからでも遅くないよ」

「先輩、神じゃん……」

俺は冷え切った全身を温めるように、ヒーターの前に座った。カウンターの扉の前で身体を丸くして。

かじかんだ指先が、じんわりと温かくなる。

「順一くんは、コーヒー飲める？」

「くれるんすか！」

頭上からの声に、ぱつと顔を上げる。カウンターに置かれた微糖コーヒー。早く大人

になりたくて夏の間到我慢して飲みまくったアイスコーヒーの恩が報われたような気がした。

「順一くんは大人だあ……。亜子ちゃんがお祝いにつけてくれたんだけど、私コーヒー飲めないんだよねえ」

「……先輩の方が大人ですよ」

「そんなことないよ」

朗らかなに笑う先輩。

受け取った缶コーヒーはまだ温かった。思ったよりも、ずつと甘かった。

先輩は椅子に座って分厚いストールを膝にかけていた。カウンターの扉の隙間から、先輩の細い足に引つ掛かるスリッパが見える。ストールの隙間から、黒いタイツも。

ヒーターを先輩の方に向けようとすると、扉に当たり、微かな物音を立てる。先輩は遠慮がちに笑う。

「大丈夫だよ、きみ、この後も練習なんでしょ？」

「室内だから平気っす」

「駄目だよ。身体を冷やしたら腰に悪いんじゃない？」

柔らかく忠告され、俺はまたヒーターを独占した。

窓を見上げてやむのを待っていると、先輩はそつと教えてくれる。

「知ってた？ 順一くん達野球部の練習って、ここから見えるんだよ？」

「先輩も見らんすか？」

「時々ね、皆寒い時も暑い時も凄いやね。さつきも頑張ってたし」

「別に凄くないっすよ。こんなのどこの高校もやってるんすよ」

「甲子園のために？」

「いや、それもあるかもしれないっすけど、そういうのじゃなくて、なんか好きなんすよねえ……」

「練習がってこと？」

「この前は打てなかったボールが打てるようになったとか、この前は取れなかったボー

ルが取れるようになったとか、そういうできなかったことができるようになるの、好きなんすよ」

「順一くんは真面目なんだね」

先輩に褒められて、俺は無愛想に否定する。

「そんなことないっすよ」

腰に違和感があっても練習は続けられるし、ヘルニアをできないことの言い訳にしたくない。そんなダサい奴になりたくない。

監督も言っていたけれど、野球はチームスポーツで、勝つことを考えればヘルニアを患っている奴をスタメン起用することは多くない。リスクを考えれば、そうなるらしい。いつ爆発するか分からない怪我持ちをスタメンで起用するのは、危険過ぎる。

そう考えると俺がベンチ入りできていることが不思議な話だ。

ヘルニア悪化を防ぐためにとかそういう理由でベンチメンバーから外すことは容易だろう。そう言われれば俺だって……。

でも、俺はそうなっていない。

活躍の機会は減っているけれど、出番がないわけではない。俺にだって可能性はある。代打で選ばれることもあれば、守備固めや代走要員の可能性だってある。

その時が来れば、俺でもチームの勝利のためにできることはある。練習を嫌いになつて、その時を逃したくない。

「……先輩も真面目っすよ」

「え、私が？ そんなことないよ」

「先輩は図書委員で、別に俺みたいにチームとかそういうのじゃないっすか。返却期限の本なんか忘れればいいのに、ちゃんと来て……」

「私も好きだから」

「……好きなんすか？」

「うん。本を借りて、読まれて、返す時にちよつとだけ話すの。好きなんだ」

「すみません、俺、読んでなくて……」

謝ると先輩は慌てたように笑った。それから、優しい調子でフォローしてくれる。

「借りた本を読むのは必須でも絶対でもないし、読みたい時に読めたらいいと思うんだよ、私は。読めなくてもいいと思うよ。順一くんにとつたら、難しかったんでしょ？」

「そうっすけど、いや、そうっすけど……」

先輩にそう言われるとその通りだと思っけど、俺の言いたいことはそういうことじゃないような気がする。でも、どういうふうに伝えればいいのか分からなくて、ただ困ったように答えるしかなかった。

「そうなんすけど、違うっっていうか……」

俺が答えに詰まっていると先輩が一冊の文庫本を俺へ差し出した。俺が借りた本と同じように古い本のように見える。でも、作者もタイトルも違って、読んだことない本だった。

「ぶしゃ……？」

「むしゃのこうじっっていうんだよ」

「……誰っすか？」

「順一くんが借りた本の人と同じぐらいの人だよ」

「昔の人なんすねえ」

「これだったら短いし読みやすいと思うよ」

文庫本はどこにも図書館の貸し出し印がなかった。俺は驚いて、先輩に訊く。

「これ、ここのじゃないやつっすか？」

「うん、そうだよ。私の。貸してあげる」

「なんで？」

俺の口から零れた当然な疑問に先輩は恥ずかしそうに聞き返す。

「……嫌？」

「嫌じゃないっす。けど、あの、先輩、もう……」

俺の声は露骨に沈んだ。先輩は大学生で、俺は高校生だ。貸してくれるのは嬉しいけれど、返すのは難しい。

対する先輩の声は不思議と明るいものだった。

「好きな時に読んで、好きな時に返してくれたらいいよ」

「いつになるか分かりませんが、いいんすか？」

「遅くなっても、いいよ。きみが卒業してからでも。私、待っているから」

「時間かかると思うんすよ、俺、先輩みたいに賢くないし本も全然読まないし……」

「いいよそれでも」

微笑む先輩は俺の悩みを全て肯定してくれる。それでも俺が何か言おうとした時、先輩がそれまでの会話を断ち切るように言う。

「雪、やんだね」

「マジっすか！」

これ以上、サボっていたら何を言われるか分からない。残っていたコーヒーを飲み干して、先輩から本を受け取る。

「今度は絶対読んで、返しに行きますから！ 待っててください！ 卒業してからでも」

絶対つすから！」

そう宣言して、俺は図書室を出た。先輩が何か言ったような気がしたけど、俺はもうドアの向こうにいて聞こえなかった。

## §

先輩から借りた本は、その日のうちに開いたけれど全然読めなかった。読みやすいと言われたけれど、全然そんなことない。図書室で借りた本の時と同じように最初だけ読んで、そこから先は読めなかった。

練習もハードになって、三年生が抜けた穴をどう埋めるか、とチームや監督と話し合う機会が増えた。

その結果、コンバートで俺のスタメン起用が決まった。ファーストだ。新しい守備位置は覚えることが多くて、先輩の本を読む時間なんて全然なかった。読まないのなら返

した方が良いのかもしれないなんて考えていたら、春になった。

三年生になると、途端に進路のこととかが母ちゃんや父ちゃんの口から出るようになった。そして、俺の一人暮らしのことも。

そこから、先輩は高校を卒業してから一人で暮らしていると母ちゃんから知らされてびっくりした。そんなこと一言も教えてくれなかったし、そんな素振りは一つも見せてくれなかった。

先輩から借りた本をどう返そうかと思つて、ぱらぱらとめくつていると、はさんだことのない葉が落ちてきた。

桜色の葉には、どこかの住所と見慣れない電話番号が書かれていた。

住所を調べると、近所のマンションが表示された。先輩達の通う大学には自転車で少しかかるぐらゐの所にあるマンション。

つてことは、この電話番号はきつと先輩だろう。先輩の連絡先が分かると、緊張で胸が爆発しそうになった。

汗ばむ手で電話をかけると、繋がらなかった。留守電に繋がって、俺はようやくやく苺を見つけて電話をかけたことを伝えた。

少しして折り返しの着信。先輩の明るく優しい声で、俺の耳に届く。

「嬉しい、読んでくれてるんだね」

俺の声は緊張していて乾いていて、固かった。

「済みません、まだ全然っす」

「いいよ、ゆっくり読んで。きっと順一くんには難しい話だと思うから」

「めっちゃむずいっす。やばいっす」

笑う先輩に、ちよつと怒りを覚える。

「そうだよねえ」

「分かってて、貸すのは酷くないっすか？」

「そう？　じゃ、返しにくる？」

「それは駄目っす。まだ全部読んでないんで」

俺の言葉に、先輩は意外そうな声を上げた。

「全部読むの？」

「読むです」

きつとあの時の本のように、読まれないと思っていたようだ。俺もそうなると思っていたけれど、先輩が折角貸してくれた本をそんなふうに掲げたくない。一頁一頁を、書かれている言葉を一つずつ追いかけて、読んで、先輩に返したい。

先輩の声は電話口で聞いたどの声よりも優しかった。

「ありがとう、待ってるね」

そうして先輩との電話は終わった。

俺は貸してもらった本を少しずつ読みはじめた。読もうと思えば、すぐにでも読み終えることができる短い小説だった。読み終えようと思えば明日にでも読み終え、先輩に返せるそんな短さだった。

でも春が終わり、ゴールデンウィークを迎え、初夏を迎えようとしても、俺はまだ読

み終わらなかつた。

先輩からの連絡は時々来て、俺はその都度、この短い小説の感想を話した。先輩は何も言わずに聞いてくれて、一つも俺が読み終わるのを急がせるようなことはなかつた。

俺が返すのを引き延ばしているのは、きつと、とつくの昔にバレていたのかもしれない。それでも先輩は、黙っていてくれた。

本を返せるようになったのは、夏休みのある日だった。受験勉強の合間合間に読んで、終わりを迎えた。読み終えてしまった以上、嘘を伝えることはできず、先輩に読み終えたことを伝えて、本を返す約束をした。そして、俺は自分の気持ちも正直に伝えた。先輩がずっと前から好きだということ。

久し振りに会った先輩はこの前の冬よりも、一段と綺麗で大人びているように見えた。本を返して、先輩のことが好きだと伝えると、私も、と小さな声で答えてくれた。そして、言うのが遅い、とも。



第 4 幕

---

タ  
ン  
デ  
ム

## タンデム

二学期最初の登校日に、友達の姉がバイクで事故をしたと聞いた。学校が終わって、まだ夏が厳しい病院までの道のりを自転車で駆ける。前のカゴに積んだ花と花瓶が、ガタガタと揺れる。

病室に駆け込むと、凜子さんは、僕の想像したよりずっと元気そうだった。一人部屋でがらんとしているけど、重苦しい空気なんて微塵も感じさない。凜子さん本人の雰囲気もあるかもしれないけど、大きな枕とかベッドに転がってる幾つかのクッションや大きなサメのクッションが一役かっている。

突然の僕の来訪を、慌てることなく、ひらひらと手を振って迎えてくれる。

「おう、安う。どした？」

拍子抜けだ。

酒と煙草で焼けた声は普段と変わらない僕を茶化すものだったけど、愛嬌のある色白な顔は、僕の見舞いが意外だったらしく驚きに満ちていた。長い茶色の髪は会った頃と比べて所々、黒い。

「え、あつ、静江さんから聞いて。……元気そうですね」

僕の素直な感想が気に食わなかったのか、凜子さんは短い眉をぐつと眉間に寄せる。元来の目付きの悪い小柄な瞳と相まって中々に怖い。

包帯がぐるぐるに巻かれて真っ白になっている片足を指差す。

「どこが元気そうにみえんだよ」

「それだけ喋れたら元気だと思いますよ」

「はあ？　なんだお前、やんのか。やるか？」

病院衣を腕まくりして臨戦態勢に入ろうとするけど、この人自分の足が折れてるの覚えてないのかな。

最後に会った時に比べて、その腕も細くなったように見える。

「やりませんよ。花、置いときます」

花瓶に花を挿して、ベッド側の枕頭台に置く。凜子さんは落ち着いた色合いの花を見下ろして、つまらさそうに言う。

「花なんて食べねーもの持ってきて、どうすんだよ」

「お見舞いの定番じゃないですか。他に何が良かったんですか？」

「煙草、酒」

「買えませんよ……」

「堂々としてたら確認なんてされねーよ」

「そういう話じゃないんですよ」

「こちらら禁煙禁酒の異常生活でストレスえぐいんだわ」

そう言って、サメの頭をぼんぼんと叩く。ストレス解消にでも、と誰かから貰ったんだろうか。

枕頭台の引き出しとか引き戸に煙草やお酒を隠し持っていると思っていたのだけど、ど

うやらそんなことはないらしい。

隠れてどこかで吸ったり、僕以外の誰かの見舞い品にお酒を忍び込ませたりしている  
と思っただけ、どうやらそこまで悪いことはしてないようだ。

そんな健康的な生活を凜子さんが受け入れているとは思ってなくてびっくりした。

「え、守ってるんですか？」

僕の反応に凜子さんも思うところがあるらしく、しおらしく言う。

「……まあ」

「え、あの凜子さんが、そんなこと律儀に守ってるんですか？」

「いやあ、まあ、あんなに怒られるって思ってた……」

視線を逸らして答える凜子さんの顔色は少し青くなった。

まさか本当に律儀に守っているとは思ってなかったけど、灸を据えられ後のようだ。

「あ、やったんですね」

「食後にな、やっぱり欲しくなるわけよ」

「それ入院期間伸びませんか？」

「それとこれとは別だっつーの。これ、結構派手にやってんだわ」

「派手につて……」

「ガードレールに吸い込まれて、飛んだぜー」

「曲がりきれなかったってことですか？」

「いや、カーブの手前で段差があつて引つかかってな。操縦不能になったわけよ。いやあ、びっくり」

聞いただけで苦い顔をする僕に、凜子さんは当事者なのに明るく笑う。

「ただけで済んで良かったらしい。そりゃ、そうだわ。飛んでもんな。すげー折れ方で、なんて言ってたかなあ、まあすげーんだわ」

「バイクは大丈夫なんですか？」

「あー、わりい……」

明るかった凜子さんの表情が少し曇った。

僕は来月には十八になる。大型バイクの免許を取り終えれば、凜子さんのバイクを譲ってもらおう予定だった。

校則でバイクの免許は取ってはいけないけど、不便だったので内緒で取った。

原付の免許を取ってから中型の免許も取った。自転車のままでも良かったんだけど、家の買い物を手伝ったり、どこかに軽く出かけたなりキャンプの時に便利で快適だった。

バレないように運転していたはずんだけど、去年の夏休みに、凜子さんの耳に入った。どうやら、同じクラスの妹さんから教えてもらったようだ。

僕の通う高校は凜子さんの母校のようで、校則を破った僕を凜子さんは歓迎してくれた。滅茶苦茶歓迎してくれた。原付だけじゃなくて、中型の免許も取っているあたり良いらしい。何が良いのかは分からないけれど。

そこから一緒にバイクで出掛けることがあった。

けど、凜子さんは僕の安全運転に合わせるようなことは一度もしてくれない。目的地だけ伝えて、一人でバイクを走らせる。

先に行く凜子さんに追いつくのも楽しかった。一人でバイクを走らせ、キャンプをするのも楽しかったけど、それはまた違う楽しさがあった。

学校までの道でバイクを停めていい所だったり、許される所だつたりを教えてくれた。僕は一度も使つたことないけど。

凜子さん曰く、バイク登校は結局駅前の駐輪場に停めるのが一番手っ取り早いらしい。登校時間を一限以降にずらしたりするのもありらしい。ただその直後に、バレると呼び出されて怒られると続けたあたり、何も参考にならない。

「別にちよつと傷とかあつたり修理して乗れたらいいですよ僕は」  
凜子さんの反応は、今まで見たことがないほど厳しかった。

「よくねーよ。安まで事故つたら、どうすんだよ」

「凜子さんみたいな無茶な運転はしませんよ」

笑つて言い返すと、呆れた声で言われる。

「お前、案外バカだろ？」

「え、喧嘩ですか？ 僕今なら勝てますよ」

「は？ やるか？ こちとら呼べば飛んでくる援軍持ちだぞ？」

「看護師さんをそんなことに使わないでくださいよ」

「勝てばいいんだよ勝てば」

「悪役の台詞ですよそれ」

「あたしが正義の味方になれると思ってんのかよ」

「悪者は自分の愛用しているバイクを譲りませんよ」

「え、つか、……お前、静江に事故のこと聞いたって言った？」

露骨な話題展開に、今度は僕が呆れる番だった。

静江さんというのは凜子さんの妹さんで、僕と同級生だ。凜子さんとは全然正反対で、誰かを馬鹿にすることはないし、煽らないし、争い事とは無縁な女の子だ。

「そうですね？ どうしたんですか急に」

「あ？ いや、ほら、静江があたしのこと話すなんてレアだし？」

「え、結構話しますよ？」

「マジで？」

今日一番大きい声が病室に響いた。驚く僕に少し謝って、顎に手を添えて、いかにも考えてますってポーズをする。

静江さんと凜子さんが普段どんな会話をしているのか知らないけど、静江さんは何だかんで凜子さんの話をする。というか、凜子さんの心配をする。後、僕のことにも心配してくれる。凜子さんに良いように使われていないのかとかそういうことを。

熟考を終えた凜子さんは、一つの結論に辿り着きぽつりと呟いた。

「……もしかして、静江に嫌われてる？」

「いや嫌ってたら話題にしないでしょ」

すぐに否定すると肩を組まれて、乱暴に頭をなでられた。安心したように僕の名前を呼ぶ。

「安〜」

褒められているらしい。

長い髪が鼻先に触れてこそばゆいし、甘い香りにドキつとする。

「やめてくださいよ……」

来月には十八になるのに、子供扱いされてるようで、あんまり良い気はしない。一人旅だつてするしキャンプだつてするしバイトもしてる。凜子さんの年齢には追いつけないけど、いつまでも子供じゃない。

こんなこと言うと、そういうところが子供なんだよ、と笑われそうだから言わないけど。僕を褒めるのに満足した凜子さんから解放されて、バイトの時間が近くなっていることに気づいた。普段はバイクで行くんだけど、今日は自転車だから急がないと間に合わない。

次の日も凜子さんのお見舞いに行った。花は好みに合わなかったの、スーパーで好みに合いそうな物を買った。スーパーの袋を見た凜子さんは昨日と比べて機嫌が良い。

と思つたら、花瓶の水を替える僕の背中に、凜子さんはとんでもない言葉を浴びせる。

「安、お前もしかして暇人か？」

「受験にバイトに勉強に……暇だと思います？」

「だったらなんで今日も来てんだよ」

「お見舞いですよ」

「聞きたいのはそこじゃねーんだわ」

花瓶を元の位置に戻してスーパールの袋から、リンゴを取り出す。

「食べます？」

凜子さんのため息が、病室に零れた。

「リンゴかよ」

「嫌いですか？」

「嫌いじゃねーけど……」

慣れた手付きでリンゴを適当な大きさにカットして、うさぎの形を作る。耳の立ったうさぎと僕を見比べて、凜子さんは意外そうに言う。

「器用じゃん」

「キャンプしてると色々作りたくなるんですよ」

「キャンプ飯ってやつ？ 今年はどこ行ったのか？」

「受験終わったら、すると思いますよ。凜子さんもします？」

「行かねーよ」

うんざりしたように答える凜子さんに苦笑を返す。

こうやってキャンプの話題をする度に凜子さんを誘ってみるけど、一度も一緒に行つたことがない。僕はバイクでどこかに行くのか好きだけど、凜子さんはバイクで走るこ  
とが好きなんだ。

うさぎを頭からかじって、凜子さんはこう言った。

「あたし、枕変わると寝られねーの」

僕はフォークを落とすようになった。何、その理由。え、ということは……。

「それ、マイ枕ですか？」

「おう。しかも、特注だぜ。このクッションもウチから持ってきたんだ」

そう言つて、凜子さんはいじらしくクッションを抱きしめる。大きなサメのクッションは、凜子さんの無事な方の足置きになつていて、布団から顔だけ出している。

お酒と煙草が好きで大型バイクにも乗る人の発言とは思えない。思えば、凜子さんの外での様子は知つてるけど、他の様子は何も知らなかつた。

凜子さんの家に入ったこともないから当然だけど、僕達はバイクという共通の趣味があつたし、外で会う方が良かった。

クッションの向こうから、凜子さんが睨んでくる。普段なら慄くけど、今は全然怖くなかつた。

「安、お前今、意外つて思つてるだろ」

「いや思つてませんけど？」

「目、泳いでんぞ」

「まあ正直に言うと、無茶苦茶意外に思つてます」

「正直に答えやがって……いいけどよ」

「お酒飲んでソファで寝るとかしないんですか？」

「はあ？ するわけねーだろ。いつでもベッドにダイブだよ。最高なんだよこれが」

そんなことを話していると、バイトの時間が近くなっていた。帰り支度をする僕に、凜子さんはそれまでの愛らしい朗らかな雰囲気とは違う、真面目な調子で僕の背中を押す。

「受験頑張れよ」

夏休みの頃から周りに言われまくっていることで、凜子さんからも言われると思っ  
なかつた。

「言われなくても頑張りますよ」

「バイトもバイクもいいけどよ」

そう呟いた凜子さんの目は、昔を懐かしんでいるのか少し後悔の色を帯びていた。バイクに乗っている時には見せない色だった。入院中は色々と考えることがあるらしい。

凜子さんは高校を卒業してからずっと働いている。本人曰く、大学に行けるほど賢く

なかったらしい。十八とか二十歳になって、勉強を続けるのも性に合わないとかも言っていた。

「一回しかない高校生活、後悔しなくねーだろ？」

「だから受験頑張れってことですか？」

「あー、わりい、頑張れっつーわけじゃねーんだわ。勉強してバイトしてもう頑張ってるだろ。なんつーかな、全部頑張る必要ねーんだわ」

普段の凜子さんからは考えられない発言だった。

「無茶して無理して、棒に振りたくねーだろ。まあでも、嫌いじゃねーけどな、そういう奴」

そう言った凜子さんは、その後すぐに僕の滞在を拒むように時間を口にした。

「僕は全部頑張りますから」

「わがままな奴だな、好きだぜそういう奴」

笑った凜子さんから逃げるように病室を出た。足早に廊下を歩き、病院を出る。頬が、

かつと熱くなる。

入院してからの凧子さんは、ずるい。今まで大きなバイクを乗り回す愉快な人だと思っていたのに、全然知らない側面を、不意に見せてくる。

高鳴る胸は全然落ち着かない。まるで僕を試しているかのようだ。

入院している間に色々と考えていることがあるらしい。何をどこまで考えているのかは全然分からないけど、僕を心配しているのか分かる。凧子さんは妹さんと自分は似ていないって言っていたけど、他人を心配するところはよく似ていると思う。ただ妹さんのように上手くできないだけだった。凧子さんの言葉を借りるのならば、賢くないってやつなのだろうか。

それから度々、合間を見つけては凧子さんのお見舞いに訪れたけど、凧子さんが病室にいない日が増えた。

リハビリをしていたり、車椅子で出掛けるようになっていた。ベッド上で過ごしている間に落ちた体力を取り戻そうとしているようだった。ベッド上で、しんど……ってボ

ヤク凜子さんを見るのは一度や二度じゃなかった。

この頃になると凜子さんの髪は全て黒くなっていて、線の細い色白な雰囲気も合わさり黙って遠めで見れば、大人しそうな女性に見えた。近づくと、目つきの悪さとがっつり削って短くなっている眉毛で全てを台無しにしてくれる。

僕が大型バイクの免許に受かると、凜子さんはまるで自分のことのように喜んでくれた。お見舞いに来るまでの間にバイク屋に顔を出したけれど、中古の大型バイクは僕が思っているよりも遥かに高かった。バイト代を工面してどうか、となるような金額ではなかった。一年しつかりバイトを続けて貯めて、ようやく届くかもしれない。そんな金額だった。

大型バイクを買うためにキャンプをしないのは悩ましい。今は受験で親からもキャンプはちよつと……と言われる状態だ。受験が終わればキャンプに行く気だったし、候補は幾つか考えていた。それができないのは、困る。

中古でそんな値段なのだから新車となるのもつとかかるのだろう。凜子さんは退院し

たら新しい大型バイクを買うつもりなのだろうか。

凜子さんに尋ねると、少し悩んでこう教えてくれた。

「あー、んー、悩んでんだよなあ……。車にすつかもなあ……。あー、でもそうすると出費がなあ……」

事故をする前から僕にバイクを譲る気だったし、そういうふうを考えていても全然不思議じゃなかった。

けど、凜子さんが車を持ってしまえば、僕との接点を失ってしまいそうで、そんな気はないと分かっていたのに続け様に尋ねるしかなかった。

「バイク、乗らなくなるんですか？」

「んなわけねーだろ」

僕の不安を振り払うかのように、凜子さんは笑って当然のように答えてくれた。

けどその言葉は、僕を励ますような嘘な気がしてならなかった。

時々凜子さんのお見舞いに行っていたけれど、夏がようやく終わって、秋が迫ってく

るといよいよ受験勉強に集中せざるを得なくなつた。

冬になって、凜子さんはようやく退院した。でも万全というにはまだ遠いらしい。通院が必要だと言っていた。

退院した凜子さんは通院にバイクを使おうとしなかった。電車とかバスとかで移動するようになっていた。通院終わるまでは乗るな、と言われたらしい。

でも、凜子さんがそういう命令に従わない人なのは分かっている。

もつと別の理由があつて、乗らないようにしている。

乗らないようにしているのではなく、凜子さんはバイクに乗れなくなっているのだと思う。

凜子さんも言っていたけれど、今回の事故で片足の骨折だけで済んでいるのは奇跡だ。通院を続ける凜子さんは、きっと一度や二度はバイクに乗ることを考えただろう。実際、僕にもバイクを貸してほしいという連絡が来た。バイトの時間だったので返事を送れなかつたけど。

バイクに乗ってみるけど事故のことを考えてしまい、上手く乗れない。ならば、高いお金を支払って大型のバイクを買うよりも、車を持ってしまった方が良い。そんなことを考えているのかもしれない。

そうやってバイクから離れてしまうのは、少し嫌だ。苦々しい思いを抱えて、車に乗り換える。きっと凜子さんも、そうやってバイクと距離を置くのは嫌なはずだ。

受験が終わって、僕は意を決して、凜子さんにバイクで出かせませんか、と声をかけた。僕の乗っているバイクはキャンプで荷物を乗せることもあり、僕以外にもう一人乗せられるようにシートなどを追加している。そこに凜子さんを乗ってもらおうというわけだ。バイクの後ろに人を乗せるのは凜子さんが初めてではないし、凜子さんも初めてでない。凜子さんも当然そのことを知っていたけれど、普段のような明るい調子ではなかった。歯切れの悪い、僕の誘いにどう答えればいいのか悩んでいて、結局渋々といった様子で、まあかまわねーけど、と答えてくれた。

目的地の話になったけど、どこかは決めてなかった。ただバイクに乗りたかっただけ

だから。そう返事をする、凜子さんは笑って同意してくれた。

出掛ける日は天気予報通り、晴れ渡っていた。僕の受験結果は無事に合格で終わり、ようやく心は軽くなった。けど今は別の重みがある。緊張と興奮を最中にいる。

当日の凜子さんは珍しく遅刻してきた。バイクの前で待っていると、病室で見た時と全然違った凜子さんが僕の方に来た。

ライダースのジャケットにパンツスタイル。それに無骨なブーツはいつもと変わらぬ恰好だったけど、眉毛はちゃんとあるし、睫毛も長いし、目も大きく見える。目付きの悪さもぐつと和らいでいる。

白い頬を彩るチークや口紅も普段の凜子さんからは考えられない柔らかな色合いだった。ヘルメット被るし見られない、と言っていた人とは思えない。

長かった黒髪は首にかかるくらいに短くなっていて、毛先は少し巻いてあり、茶色い。日を受けると茶色の髪が赤みががって見える。

見惚れる僕に、凜子さんは照れたように言う。

「んだよ、おかしいかよ？」

「え、いや、きれいです……」

正直に答えると凜子さんは、はぐらかすかのように教えてくれた。

「元々、切る予定だったし色も入れる予定だったんだわ。それだけの予定だったんだけどなあ……。んで、この後に出掛ける予定あるって言ったら、まあ色々訊かれて、セツトもメイクも気合い入れられてよ。バイクで出掛けるのに、これだぜ？ どうせほとんど見えねーの」

「見れて良かったです」

「どいつもいつも……」

大きなため息をつく凜子さんにヘルメットを渡す。

「で、結局、どうすんだ？」

「どう？」

「行き先だよ行き先」

「決めてませんよ」

「マジだったんかよ……」

僕のバイクは凜子さんのバイクと違って高速は走れない。下道の選択しかないのだけれど、バイクで二人乗りで下道となった時の選択肢は山のようにある。普段だったら目的地を決めるのだけれど、今日はそういう気分でも目的でもなかった。

「マジですよ。でも、そういうのも嫌いじゃないでしょ？」

「あー、まあ嫌いじゃねーけどよ……。頼むぜ？」

「任せてください。しつかり掴まってくださいね。何かあつたら肩、叩いてください。止まりますから」

そう言つて、走り出す。

キャンプの荷物に乗せている時とは全然違う重さだった。

他の人に乗せている時とは違った重みが、後ろに存在している。普段よりもずっと安全を考慮して、走る。スピードも出し過ぎないように。

少しずつ慣れ親しんだ景色は遠のき、見慣れない景色も線のように現れては消えていく。消えたかと思えば、また別の景色が現れる。波のようだった。

凜子さんは入院期間中に本人が言っていたけれど、車の免許は取っていて、それでもバイクに乗り続けている人だ。

買い物でレンタカーを使うようなことはあるらしいけど、その都度、やっぱ違うよなあ……って思うらしい。

慣れ親しんだ景色が流れていき、自然と一体になって風のようになれる瞬間を、凜子さんは好んでいる。

だから、凜子さんはバイクを走らせるだけで良かった。  
今なら僕もその気持ちがいだけ分かる。

どこかに停めてしまえば、僕達はもう帰路に着くだろう。走り続けられるのならば、どこまでも走っていたかった。

今この瞬間だけは、僕が、凜子さんよりも前にいる。彼女の一生を預かり、前へ前へ

と導いている。

自然と一体になれるよりも遙かな昂揚感が、僕の胸にあった。受験に合格したとか初めてキャンプをした時とは全然違う喜びや充足感が、胸に広がる。

けど、その時は不意にやってきた。

肩を数度叩かれ、近くのコンビニにバイクを停める。

スマホで所在地を確認すると全然走ってなかった。煙草でも吸いたくなつたのだろうか。ヘルメットを外して、後ろに尋ねる。凜子さんはバイクから降りているけど、ヘルメットは外してなかった。どうやら煙草じゃないらしい。

「何かありましたか？」

「……楽しそうだな、羨ましーわ」

いつかのお見舞いの時に聞いた真面目な声だった。

僕は凜子さんの口からその続きを聞くのが怖くなって、自分から訊いた。誘ったのは僕だから、僕の方から訊かないといけないような気がした。

病院だったら、凜子さんから聞くことはできたかもしれない。

でも、もう凜子さんは病院にいるような人じゃないし、そういう部分を人に見せるような人じゃなかった。そういう部分を外で見せることを嫌がる人だ。

「やっぱり怖いですか？」

「……あ？ 何言ってるんだよ」

低い声で吐き捨てるように言う。ヘルメットの奥の瞳はきつと睨みつけていることだろう。

「そんな気がして」

「なんで？」

「もうバイクに乗らないような気がして」

「安、お前なに言ってるんだよ。そんなわけねーだろ」

「凜子さんは、楽しくないですか？」

結局、そう訊くしかなかった。

僕はまだバイクで事故を起こしたことはないし、凜子さんの気持ちは分からない。凜子さんからしてみれば、ずっと永遠に分かつてほしくない気持ちだろう。

「ずりーな……」

凜子さんは感傷的に呟いて、僕にヘルメットを預けると背を向けて、喫煙所へ歩く。

凜子さんの背中を向こうから、細い煙が揺蕩っていた。

僕は凜子さんの側に駆け寄ることはできず、どういう言葉をかけるべきか迷っていた。

僕もそんなこと訊きたくなかった。

そう訊くのがどれほど卑怯で、ずるいことなのか分かっていた。でも、そう訊くことでしか前へ進むしかできないこともある。凜子さんが認めたくない現実が横たわっていることを認めさせ、前へ進ませるしかない。

もし凜子さんが楽しくないと答えても、僕はそれで良かった。むしろ、そう言うてくれる方が嬉しいとすら思う。凜子さんの頭を過ぎる事故の記憶は凜子さん自身にしか分からないだろうし、強がるにも限界がある。

「じゃ、こうしませんか。僕も正直に言います」

「安が何を言うんだよ」

こんな時に言うようなことじゃないと思うけど、この場を逃せば言えないようなことだった。

「凜子さんに言いたいことがあるんですよ、僕」

「言えよ」

「凜子さんが答えてくれたら言います」

凜子さんは声を上げて笑った後、乱暴な手付きで煙草を灰皿に押し付けて、すぐに二本目の煙草を吸ったようでもた細い煙が立ち上っている。

二本目の煙草を吸い終わると、凜子さんは俯きがちに戻ってきた。

「……楽しいけどよ」

凜子さんは一度、言葉を切った。それから、僕に預けたヘルメを被る。ヘルメットの中で凜子さんがどうい表情をしているのかは分からない。

か細い声が返ってきた。その声が震えていたのは、僕の聞き間違えじゃないだろう。「自分で走ってるわけじゃねーのに、こえーんだよ」

すぐに僕を急かす。

「お前の番だぜ、言えよ」

僕は張り裂けそうな心臓を落ち着かせようと呼吸を整えて、告白する。

「凜子さんのことが好きです」

「……は？」

凜子さんがヘルメットを外し、僕の言葉が本当か確かめるようにじつと見てくる。凜子さんの目の周りは黒くなっていて、その目には見たことのない動揺が浮かんでいる。

「……安、マジで言ってるのか？」

「マジです」

凜子さんは沈黙を拒むように、あー、と零して、言い訳するように言葉を並べる。

「あたし、あれだぜ、安が思ってるほど良くねーぜ。無職になったし、歳も上。それに、

貯金もねーし、賢くもねーしよ。きれーでかわいいーわけでも……。それでも、良いのかよ？

「良いです。そうやって正直なところも好きです」

僕の答えを聞いて、凜子さんは恥ずかしそうに不器用に笑った。

「ありがとな、安」

そうして僕達は行きの時よりも近しい距離になって、帰路についた。

## 後書き

この度は、新刊である「夏恋 他三篇」を手に取っていただきありがとうございます。はじめまして、サークル「出藍文庫」代表の近藤貴弥と申します。普段は、二次創作を書いたり、同人誌を頒布したり、純文学系の公募に小説を投稿しております。

各々の短編が生まれた経緯は左記の通りです。

・夏恋——知り合いの物書きと、喫茶店で関係性が変わるというテーマで何か書かないか、という話になり書き上げた短編を改稿した作品。その時とは違い、登場人物との関係を変更したり、サゲを変更したりしております。

・郷愁——阿波しらすぎ文学賞という、徳島を舞台にした原稿用紙一五枚という規定の地方文学の新人賞があり、その時に書いた短編。結果は芳しくありませんでした。

・返却期限——ソナーズという新しくできた投稿サイトに投稿してみようと思った書い

た短編の改稿した作品。

・タンデム——今年こそは文学フリマ京都出るぞ、と思ったので、書き上げた短編。頒布しようと思った短編全てが、お姉さんと少年の関係性を描いたものだったので、そんな感じの作品にしようと思ってきました。

pixivや個人サイトで掲載していたので、既に読まれている方はおられるかもしれませんが。もしこの短編集を気に入っていただき、他にどのような作品を書いているのか気になられる方がおられましたら、左記の個人サイトに全ての過去作を掲載しておりますので、そちらを確認していただければ幸いです。

<https://strn2014.com/>

最後となりましたが、組版を承ってくれた㊦氏、表紙デザインを承ってくれたむへどるり氏に謝辞を申し上げます。

二〇二二年十二月上旬 近藤貴弥

# 夏恋他三篇

---

初 版 2023年(令和5年)1月15日

印 刷 ちよ古っ都製本工房

発 行 者 近藤貴弥(出藍文庫)

連 絡 先 [stkk7.920521@gmail.com](mailto:stkk7.920521@gmail.com)

表 紙 むへどるり(ぼとしゅやスタジオ)

組 版 RedForestDesigning

ロゴデザイン 工 藤 雅 弘

---

本書の無断転載・販売・無断複製等を禁じます。